

## 未熟卵体外受精胚移植法(IVM-IVF)より出生した児の追跡調査結果

中西 麻実<sup>1</sup>、樽井 幸与<sup>1</sup>、三村 結香<sup>1</sup>、水野 里志<sup>1</sup>、幸池 明希子<sup>2</sup>、福田 愛作<sup>1</sup>、森本 義晴<sup>2</sup>

<sup>1</sup>IVF 大阪クリニック <sup>2</sup>HORAC グランフロント大阪クリニック

### 【目的】

未熟卵体外受精胚移植法(IVM-IVF)は 1999 年に当院がわが国で初めて妊娠・出産に成功し 20 年以上経過している。当院にて IVM-IVF により妊娠出産した患者に対する調査結果をもとに IVM-IVF 由来出生児に関するデータを集計、厚生労働省の大規模調査データと比較し IVM-IVF の安全性の検証を試みた。

### 【対象と方法】

1999 年から 2019 年の間に実施した IVM-IVF にて妊娠・単胎出産に至った追跡不明 1 児を含む 127 児(新鮮胚移植由来男児 31 児、女児 38 児と融解胚移植由来男児 29 児、女児 28 児)を対象とした。アンケートの回答を得られた児の出生時、1 歳、1 歳半、3 歳における体重を、厚生労働省身体発育データ(平成 22 年乳幼児身体発育調査)のパーセンタイル曲線にあてはめ、新鮮胚移植由来児と融解胚移植由来児を男女別に解析した。先天異常率については国際モニタリングセンター日本支部のデータと比較した。

### 【結果】

新鮮胚移植由来女児の出生時のデータと新鮮胚移植由来男児と女児、融解胚移植由来男児と女児の 1 歳半時のデータの平均値は厚労省パーセンタイル曲線の 75-90%に位置していたが、それ以外の調査点では、男児女児共に、新鮮・凍結胚移植にかかわらず体重の平均値は、全てパーセンタイル曲線の 25-75%内に位置していた。IVM-IVF 由来児の出生時先天異常率は 3.9%(新鮮胚移植由来 2 児 2.9%、融解胚移植由来 3 児 5.1%)であり、2019 年の国内の平均先天異常率 2.9%と比べ有意差は見られなかった。

### 【考察】

IVF-IVM 由来児では体重平均値のほとんどがパーセンタイル曲線の 25-75%内に位置し、国内出生児平均値との間に差は認められなかった。また、先天異常率にも差がなかった。これらの結果から、IVM-IVF は 3 歳までの児の身体発育に影響しないと考えられる。今後も児の長期予後調査を継続し IVM-IVF の安全性について検証したい。